

教育思想の変遷と哲学館・東洋大学における心理学・教育学

科目担当者を中心として

清水 乞 *shimizu radashi*

はじめに

哲学館開設時に提出された井上円了（以下円了という）の履歴書（明治二十年七月二二日・東洋大学百年史資料編1・上 八五頁）の職務に関する事項に「一 明治十八年より十九年まで東京大学研究生となり傍ら同人社及び成立学舎教員となる」とある。

また『心理摘要』（明治二〇年九月・初版）の序言に次の通り述べられている（要旨）。

一、「先に余が親友中原貞七君成立学舎女子部を設立し余に嘱するに心理学の講師を以てし併せて課業用書を編述せんことを望まる」。当時『仏教活論序論』（明治二十年二月初版）の執筆中であった。近頃、『仏教活論本論』（明治二〇年二月初版）が脱稿に近づいた。この書は心理学に関する記述が多いので、「心理の大綱」を説明する必要があると感じ、『心理摘要』を著した。これは女子部の課業書であるが、『仏教活論』の参考書でもあ

る。

一、「術語の訳字及び叙述の次第」は『仏教活論』の参考の便を計ったものである。

一、「余昨年来通信講学会心理学の部を負担し毎月その講義を筆録して同会員に頒布せるものあり。是れ稍、詳

細に心理学の大意を叙述もの」である。未だ完成していないが、完成すれば刊行の予定であるから、本書中の疑問の点は後日これを参考されたい。

明治二十年八月 著者 誌

右にでる『通信教授心理学』の発行元通信講学会について、「通信教授の嚆矢として」横山健堂「文部大臣を中心として評論せる日本教育之変遷」（大正三年）は設立のエピソードを次の様に伝えている（一八五—一八六頁）。この円了の著書は本論執筆の契機になった極めて興味深いものであり、「通信講学会」は湯本武比古が深く関係した会であるので、ここに引用しておく。

通信教授の嚆矢：伯大木：西村茂樹：山縣悌二郎：辻敬之

○吾輩は、此に、序を以て通信教授の嚆矢を語るべし。通信教授は、明治の文化開発に於ける一大事項なればなり。

○通信教授は、伯大木の文部卿、子森の文部御用掛たりし時に始まる。創業者は辻敬之にして、此の事業の立案者は山縣悌二郎なりき。山縣は、教育界の一先輩、今、内外出版協会に隠る。当年少年団の刊行を以て、吾が国の少年雑誌の嚆矢となり、一時、学生界を風靡したることあり。今、三十五六より四十五六の人は、少年団の名を記憶せざるは無かるべし。

○伯大木の時、西村茂樹編輯局長たり。編輯事業は、大木の一大事業、此の事、吾輩既に論述す。而して西村は碩学にして、一時、局中に数多の学者を網羅し、編輯に与るもの七八十名の多きに上りしことあり。其中に、南摩綱紀と山縣とは、文部卿附の御用掛たり。御用掛の名称は、随分、重宝に用いらる。この場合に於ては、囑託

員と見るべし。

○彼等条文館の樓上に在って筆を執る。伯大木は、編輯事業には、趣味を有し、中々、干渉も試みしかども、文部省に出勤すること少く、出勤すといえども、大概、一時間位にして退出するを例とし、彼ら二人者に指示する用務も、随つて多からざれば、南摩は、適意の文を作り、山縣は外国雑誌を読み耽ること少なからず。

○当時、山縣の被読せし外国語雑誌の中に、ニューイングランドの雑誌に、Correspondence Universityといえるを發見し頗る奇異の思を為す。その中に、Instruction by Communicationの標語あるを見て、通信に依りて教育を為し得べき方法を啓發され、此事を辻敬之に話し、工夫の末、通信教授と命名し、「通信講学会」の名を以て、講義録を發行し、意外の成功を収め得たるなり。輒近、社会教育上、偉大の成績を挙げつゝある講義録は此の如くにして、生れ出でたるなり。而して講義録の發達に至つては、此に論及するの必要を見ずと雖も、また一個興味ある問題たるを失わず。

この講義録は分冊で明治一九年から發行されたようで、先ず能勢榮の「教育学」と円了の「心理学」から始まる。西村正三郎『小学德育新論』（普及舎 明治二十一年一月）の末尾広告では能勢の「教育学」は一九冊、円了の「心理学」は一四冊まで發行されている。

履歴書に見られる同人社での仕事の具体的な内容は不明であるが、同人社への就職は円了が卒業の年まで易經の講義を受けていた中村正直の世話によるものであったから漢学関係の教師であったかも知れない。このことは兎も角、教育者としての円了の最初の仕事は「心理学」であったことは重要である。成立学社女子部の規則によると、設置目的は「女子に須要なる學術技芸を教授し及び教育者たるべき女子を養成すること」とあり、「心理

は師範科の科目であった（『東京留学指針』興文社編・明治三二年）。このための教科書として、『心理摘要』は編まれたのであった。

本稿の目的は哲学館・東洋大学における心理学・教育学の継承を、昭和二〇年以前の担当者とその業績によって、描写することであるが、冒頭に述べた円了の履歴に注目し、円了を育て、かつ哲学館・東洋大学が辿った、近代日本における心理学の発達史を、先ず高島平三郎（慶応元〜昭和二一・一八六五〜一九四六）谷本富（慶応三〜昭和二一・一八六八〜一九四六）二人の教育学者の証言を中心に通観し、併せて野田義夫『明治教育史』（明治四〇年）を初めその他『教育史』著作に依って、教育近代化の過程とそれに伴う教育思想の変遷とを考察しておきたい。従って、本稿の重点は心理学にあるが、必然的に教育学に言及せざるをえず、全体としては、哲学館・東洋大学における教育学の群像を通観することになる。

一、明治時代心理学の発達史

一―一 高島平三郎の四期説

長期に亘り東洋大学の心理学の講義を担当し、昭和十九年十一月、東洋大学第一三代学長に就任した高島平三郎は明治時代の心理学を四期に分けて、次のように解説している（『心理百話』洛陽堂 明治四五年による。『心理漫筆』明治三一年と同じ）。

之（致知学 明治七年九月）に次ぎて、先生（西周・文政一二年〜明治三〇年・一八二九〜一八九七）は明治

十一年一月ヘヴン (Haven) の精神哲学 (Mental Philosophy) を訳し、心理学と名けて、公にせられたり。是純粹の心理学が我国に紹介せられし嚆矢なり (二頁)

其後明治十五年八月井上哲次郎 (安政二年〜昭和一九年・一八五六〜一九四四) はベイン (Baun) の精神科学 (Mental Science) を抄訳して心理新説と名けられたり、此書は所説簡明なりければ、広く教科書に用いられ、一時大に行はれき (二頁)

心理新説既に行われて、稍人の厭く頃に至り、明治十八年三月西村茂樹 (文政一年〜明治三五年・一八二八〜一九〇二) 先生は、西洋の学説に儒佛の説を加えたる心学講義といえる書を著はされたり。此書は従来の訳書と異なりて、引用該博なれば読みて益あること多けれども、餘り広く行はれざりしが如し (三頁)

又同年十一月有賀長雄氏 (万延元年〜大正一〇年・一八六〇〜一九二二) はサリー (Sully) の心理綱要 (Outlines of Psychology) を訳補せられぬ。此書は教育適用心理学という名の下に大に時好に投じ、今猶各地の師範学校にて参考書として必要の部類に算へらる (三頁)

明治二十三年十二月、元良勇次郎氏 (安政五年〜大正一二年・一八五八〜一九二二) の心理学出ず。氏は米國に於て此学を専攻せられたる人なれば其書も従来の翻訳書とは撰を異にし、僅々三百ページに足らざる小冊子なれども、目下欧米に於て有名なるヴント (Wundt) ラッド (Ladd) チェームス (James) ヘフチング (Hoffding) 等の新説を網羅し、且自己の実験及び学説を加えられたり。盖し我邦に専門の心理学者ありて、専門の書を著はし、こと元良氏より初れりというべし (四頁) (以上「我国の心理学史」)

第一期 ヘヴン時代 (以下編訳者の下の出版年は筆者による加筆)

奚般氏心理学（西周訳 明治八〜九年文部省）

第二期 ベイン時代

人心論・百科全書の内（川本清一訳 明治九〜十六年文部省）、心理新説（井上哲次郎訳 明治一五年）、心理全書（田中登作訳 明治一九年普及会？）、心理学（矢島錦蔵訳 明治一九年六分冊）、実用心理学（国府寺新作編 明治二五年）、心身相関之理（谷本富 等訳 明治二〇年）

第三期 サリイ時代

教育適用心理学（有賀長雄訳 明治一九年九月）、心理学之応用（西村正三郎訳 明治二〇年）、左氏応用心理学（和久正辰訳 明治二〇年）、心理学（沢柳政太郎編 明治二三年）、心理学（宮川鉄次郎編 明治二三年）、心理要略（坪井仙次郎編 明治十六年）、心理学（井上円了講述 明治一九年）、心学講義（西村茂樹講述 明治一八〜一九年）、普通心理学（矢島錦蔵訳 ？）、心理摘要（井上円了編 明治二〇年）、新編心理学（峰是三郎編 明治二三年）

第四期 新心理学時代

心理学（元良勇次郎著 明治二三年）、新編心理学講義（牧瀬五一郎講述 明治二五年）、児童心理学（本庄太一郎訳 ？）、麟氏実験心理学（三石賤夫訳 明治三〇年）、根氏心理学（能勢栄訳 明治二六年）、心理綱要（高島平三郎編 ？）、小学校実用心理学（湯本武比古訳 明治二二・二四年）、新編応用心理学（同上 明治二七年）、ヴント生理的心理学・高等学術講義の中（元良・米山 二氏訳 ？）、埴氏心理学（藤代禎輔訳 明治二八年）、普通心理学（沢柳政太郎編 明治二七年）ヘルバルト心理学（国府寺新作訳 明治二八年）、幼児心理発達之理（寺内顕訳 明治二八年）、ヘフチング心理学（石田新太郎訳 明治二八年）、普通心理学集成（谷本富編 明治

三〇年)、心理学(神谷四郎訳 明治三〇年)、ラッド初等心理学(尾田信忠訳 明治三〇年)、心理学十回講義(元良勇次郎著 明治三〇年八月)、児童心理学講義(松本孝次郎編 明治三一年三月)、普通心理学講義(松本孝次郎編 明治三一年六月) 明治三一年一〇月調査 合計三八部

第一期に於ては、僅に西先生の訳書ありしのみにて、其説は心の能力を根本とし、独断的に分類説明せしもの多く、且宗教と少からざる關係を有せり。是れ著者の宗教家たるを以てなり(七頁)

第二期に至りて、生理的心理学の思想を鼓吹せられたり。是れベインの賜なり。然れども我国に行はれたる訳書は、原書の意を適当に且つ充分に表明せしものなく、只読者を霧を隔てて花を見たるに過ぎざりしが如し(七八頁)

第三期のサリイは其原書のベインに比して、稍通俗的なると共に有賀氏の訳書も能く原書の要旨を網羅して餘さざりければ、大に教育社会を益せしもの如し。盖、サリイの書は、宛もヘヴン時代の思想とベイン等の学説とを融和折衷せしが如く、其説公平にして解し易く、加うるに教育上に応用すべき次第をも懇切に記しあればなり(八頁)

第四期を新心理学時代という所以は、此頃より欧米に於て、新に勃興せし児童心理学、生理的心理学、実験心理学等の学説、次第に学者間に唱導せられ、且ヘルバルト派の觀念説は入り来りて、従来の能力説に代りたればなり。されども此期は未だ一定の傾向なく、只新心理学の思想の入りたるのみにて、種々の説混淆せり(八〇九頁)(以上「心理学説の変化」)

一―二 谷本富の三期説

谷本富『普通心理学集成』上巻 六盟館 明治三〇年五月(『高等教育学科通典』第一篇)

「我国に於ける心理学の発達」

西周『致知学』第四章に「性理の学」として心理学に言及あり（明治七年六月）（三頁）

西周『利学』（ミル著のユーチリタリズム）序文（明治一〇年）

〔中略〕近日に至りて所謂哲学はその區別一定する者のごとし。その中、性理学（サイコロジ）を推して之を本源と為す。而して人の性の作用、之を区して三と為す。一に曰く、智なり。是れ致知の学（ロジック）、これを律する所以なり。二に曰く、意なり。是れ道德の学（モラル）、これを範する所以なり。三に曰く、情なり。美妙の論（エステテック）、これを悉する所以なり。是此の三学を以て源を性理の一学に取り、而して流を人事の諸学に開き、哲学の全軀を成す所以なり。故に曰く、哲学は百学の学なり。（四頁）

『奚般氏心理学』、此の書一度出てより忽ち広く世にもはやされ、東京師範学校を始めとし、全国邦語を以てこの類の学を講究せんとする者は皆これを参考書としたりき。その頃の「東京師範学校一覽」自明治十三年九月至明治十四年九月を見るに、本科下級に於て、心理学を授くることとし、一週五時間即ち一期九十時間にして、課程は智（表現力、再現力、反射力、道理）情（欲、性、望、愛）意及び徳と列挙したり。（五頁）

ウエーランド『The Elements of Intellectual Philosophy, 1859 都下の英学校にありては、之れを教科書に採用したりし所も少なざりき、現に余が始めて故中村敬宇の同人社に入りて英書に就きて心理学を習いたるは、実に此の書にありしなり。以上 第一期

西村茂樹『心学講義』（七〜八頁）

東京大学・外山正一申報（明治一三年九月〜明治一四年十二月）（九〜一〇頁）

サレー『心理学綱要』Outlines of Psychology, 1884 明治一八年に我国に輸入され、東京大学では、ベインに代

りサレーを用いる。余が東京大学哲学科に在学中（明治一八〇二二年）にはサレーとスペンサーの『心理学初歩』Principle of Psychologyを教科書とし、傍らダーヴィン、ローメンスの心理学に関する部分を授かった。（一〇〇―一頁）

ペイン、スペンサー、サレーの書の流行を以て我国心理学の第二期とす。（一二頁）
ペイン、スペンサーは心理学の解剖学的・生理学的側面を解く。

第二と第三期の中間、ラッド『生理的心理学原論』一八八七とリボー『今日の独逸心理学』バルトヴィン英訳一八八六、この二書は明治二一年ころ帝国大学の図書館にあった。ドイツ語は十分に社会に広まっていなかった。この二書は「新心理学開導の功大なりとせざるべからず」。（一四頁）

明治二一年夏、元良勇次郎の帰朝、帝国大学に精神物理学の一課が開設され、心理学実験の端緒を開く。（一五頁）

明治二〇年、ハウスクネヒトが教育学の課目「教育応用心理学」としてヘルバルトの心理学を講ず。リンドネル『経験的心理学』 第三期（一八頁）
その他

明治一九年の学制の改革により、高等中学校法文科第一年、理科二年生に心理学の初歩を課す。教科書は多くサレー『教師用心理学小本』であった。（一九頁）

東京師範学校では、明治一二年心理学を課目中に加え、『奚般氏心理学』、『心理新説』、次にペイン Mental Science サレー Teacher's Handbook of Psychology が長く使用された。余が教育学、哲学の教授に就任して講義草稿を使用し、参考書にリンドネル、ドルバルなどを指定した。『普通心理学集成』はこの草稿の一部である。

過去三年（明治二七、二九年）の新生活に對する心理学書購読調査。

元良『心理学』一七%、有賀『教育適用心理学』四九%、和久『左氏応用心理学』一七%、井上（哲）『心理新説』五%、柳沢『心理学』四%、西『奚般氏心理学』三%、湯本『応用心理学』二%、牧瀬『新編心理学講義』、能勢『根氏心理学』、井上（円）『心理学』、峰『新編心理学』以上一%。（二一、二二頁）
最後に高島『心理漫談』の第一と第二を抄録する。（二三、二四頁）

一—三 西村茂樹の談話

高島が第三期に入れている『心学講義』の著者西村茂樹はその『読書次第』（明治二六年 博文館二一、二五頁）において、高島より五年先であるが、次の様に述べていて、高島説の良き補足説明になっている。

（前略）現今は良善なる訳書甚少なし、訳書の不完全なる点を挙ぐれば、第一、文義甚だ晦渋にして、原書の主意を知ること難し、第二、訳字多く不穩当にして読者、原文の意を誤解することあり、第三、訳家好んで小冊なる原書を訳し、原書の大冊なる者は多く之を摘訳するを以て、其学科の全体を尽くすこと能はず、第四、原文を誤訳する者亦鮮ならず、訳書には右等の欠点あることなれば、成るべきは原書を読むを宜しとすべし、

「心理学 西周訳」

此書は米国の学士約瑟奚般の著「メンタル、フィロソフィイ」を訳したるものなり、西国の心理は近古の時より無形学メタフィジックスと心象学サイコロジイとの二派に分れ（余が著はせる心学講義上卷十三丁より十八丁までを見るべし）此原書は其無形学に属する者なり、英国にては、最近実物学（又唯物論）流行するを以て、学者多く心象学盛んに行はるゝと見れば、此書の如きは亦決して棄擲すべき者に非るなり、

「心理新説 井上哲次郎訳」

「心理全書 田中登作 三名共訳」

此二書は共に英国の学士亜歴山得倍因の「メンタルサイエンス」を訳したる者なり、倍因は所謂後天の学派にして唯物論者なれば、此書は心象学なり、議論頗る高尚なりと雖も、能く、其要領を了解することを得べし、心理新説は其大綱のみを訳したる者なれば、少しく簡略に過ぐる憾あり、心理全書を読むを宜しとすべし、

「心理学 有賀長雄講述」

英国の学士惹米斯撒黎の「ハンドブック・オブ・サイコロジイ」を訳し之に自己の説を加えたる者なるべし、撒黎は唯物論者にして又進化論者なり、故に此書もまた心象学なり、有賀氏の凡例に曰く、昨年発行のサレイ氏心理撮要なる書ありて、新旧の眞説を網羅し、就中教育に関する論説を掲ぐる懇切蘊なし、故に本書に於てもサレイに依る所最も多きに居れり、とあり

「応用心理学 和久正辰訳」（明治二〇年・九七二頁―引用者）

此書は全く惹米斯撒黎の「ハンドブック・オブ・サイコロジイ」を訳したる者にして、有賀氏の訳書とは其体裁順序を異にせり。

二 円了心理学形成への影響

二―一 東京大学における講義

この点に関しては、講義の担当者であった外山正一（嘉永九年〜明治三三年・一八四八〜一九〇〇）の年次報告に詳しい。ここでは円了が哲学科二年生として在籍していた明治一五年九月〜一六年七月の「哲学、史学及英

文学教授 外山 正一 申報」(東京大学年報第二冊二二九〜二二二頁)によることにする。

第一 理学部二年生に毎週三時間、哲学科二年生に毎週一時間、英語を講授したり、其目的及課業書、講授の法等の如きは前年と異同あるなし、即ち学生をして英書の文意を解することに達者ならしめんとするを以て専一となし、理学部学生の課業書にはシエキスピーヤ氏著レーガル、エマーソン氏著カルチュア及びビヘーピア等の如きものを用いたり、哲学科学生の課業書にはシエキスピーヤ氏著ハムレット、エマーソン氏著シビリゼイション、アート・エロクエンスブックス等の如きもの及マコーレー氏著フツレデリッキ・デ・グレート等を用いたり、此哲学科学生も学年の初は毎週三時間を以て授業の時間となしたれども、該級生の如きは夥多の論文を草せざるを得ざる者にして、頗る勉強を要し、且つ学科の性質たる理学部学生の学科の如きものとは違い到底読書を専にする者なるが故に授業の時間を減少するも左まで害なき者と認めて、之を毎週一時間になしたり、而して本年の終まで該学生の進歩したる有様に就て徴するに 余の考と果して違ふことあらざりき、理学部学生の進歩の如きも概して云えば余をして満足せしめたるなり(後略―引用者)

第二 毎週三時間哲学科二年生及和漢文学科二年生に心理学を講授したり、課業書及授業の法の如きは前年と大差異あることなし、即ちペイン氏、カーペンター氏、スペンセル氏等の著書を用い、授業には課業書と口授と研究の三法を用いたり、研究の法に於ては学生をして各々心理学十問題を撰び引用書に就て充分窄鑿を遂げ之を論文に綴り教場に於て学生の前にて音読せしめたり、而して本学年中に心理学の大略を授くることを得たり、殊に哲学科には学力優等にして進歩も亦著かりき、

第三 文学部二年生に毎週三時間史論を講授したり(以下省略―引用者)

第四 余は哲学科四年生に毎週三時間心理学の高尚なる部分を講授す、即ち一方に於ては心理学の高尚なる原

理を授け、又一方に於ては人類の心力と下等動物の心力との比較、心力の発動、動物及び人類表情上の言語等を研究せしめたり、本年学生の如きは言、訥なるも頗る想、想に富み其進歩の如きは余をして甚だ満足せしめたり、

○「教科課程」(東京大学法理文三学部一覽 東京 丸家善七 明治一、一三〜一七 五冊 明治一六年〜一七年一二〇頁)

哲学は分て東洋及び西洋の二とす、東洋哲学に於ては第二年に東洋哲学史、第三及第四年に印度哲学及支那哲学を教導するものとす(以下省略―引用者)

○教科書

八宗綱要輔教編、四教儀、維摩經、大学、中庸、論語、孟子、詩經、易經、老子、莊子

西洋哲学に於ては第二年に心理学、西洋哲学史、社会学、第三年に近世哲学、第四年に心理学、道義学及審美学を教導するものとす

第二年に於て授くる講義の課目三あり、即ち第一心理学、第二哲学史、第三世態学なり

第一心理学 精神の解及哲学の原理総論【第二年】

精神生理学を教導し以て学生をして心体の間、恆に密着の關係を有するものなることを知らしめ且心は決して或る心理学者の想像する如き独立主宰の性質あるものに非ずして常に心上凡百の動作のみならず所謂意志と雖も身体機関の状態に關せずして全く独立するものに非ざる所以を覺知せしむるものとす(九三頁)

○用書

ベイン氏著 心理学、カルペンタル氏著 精神生理学、マーズレー氏著 精神生理及病理学 【明治一三年】
一四年では参考書】、アベルクロンビー氏著 智力学、ヘッケル氏著 創造史、スペンセル氏著 哲学原理総論、
スペンセル氏著 生物原論等

第二哲学史（省略―引用者）

第三年に於て授くる講義の課目二あり、即ち第一近世哲学、第二印度及支那哲学是なり（九四頁）

第一近世哲学

欧州近世哲學家中最も著名なる三者の哲学を一層細密に講ず、固より終始諸哲學家の説と相比較し、以て其理を
明晰ならしむ、三氏とはカント、ヘーゲル、スペンセルにして、蓋し其哲学の現時の問題に最も緊切なる關係を
有するものなるが故に乃ち選択するなり（九五頁）

○用書は

カント氏著 純理論、ワレーズ氏著 ヘーゲル氏論理学、スペンセル氏著 心理学第二卷、
ミル氏著 ハミルトン氏哲学 及びヒューム氏著 人性論とし、且講義も亦之を授く

第二印度及支那哲学（省略―引用者）

第四年に授くる講義の課目に三あり即ち、第一心理学第二道義学及審美学、第三印度及支那哲学是なり

第一心理学【第四年】

本年に於ては漸く進んで高等なる心理学を学ばしめ、其他人類と下等動物との心力の比較、太古と開明時代間の

人心の変遷、動物及人類表情上の言語及用智上の言語及修文の変遷等の諸題を研究せしむ

○用書

ダルヴェイン氏著 生物原始論、人類原始論、情緒発頭論、リュイス氏著 哲学史、タイロル氏著 太古人類史、ルーボック氏著 開化起原論、レックケー氏著 欧土明理説、スペンセル氏著 万物開進論、心理学、フィスク氏著 万有哲学、スペンセル氏著 心論文集、ミル氏著 論文集等とす。

第二道義学及審美学（省略―引用者）（九六頁）

第三印度及支那哲学（省略―引用者）（九七頁）

右の「教科課程」では、心理学に限らず哲学の教科書の多くが、明治十六年秋から書き始められた「稿録」に抜き書きされており、円了の勉強ぶりをより具体的に知ることが出来る。

二―二 思想界・学界の人々

高島と谷本の論文は短いものであるが、明治期における欧米心理学説の紹介とその影響を受けて著された著作を詳細に伝えている。

第一期の西周を始め、高島が第二期と第三期に入れているペインとサリーの翻訳者、またはその学説に基づいて心理学を概説している人々は必ずしも厳密な意味では心理学者ではなく、広く西欧の学術・思想と積極的に取り組んでいた人々である。

○西周『奚般氏心理学』（上巻・五九八頁、下巻・三七五頁、引用書・三三九頁）

西は翻訳凡例を次の様に書いている。(カナ表記・漢音写は英語に戻した)

一、原書はアメリカ聯邦のジョーセフ・ヘブン (JOSEPH HAVEN) 氏の著わす所にして、ヘブン氏は前時、アムヘリストの大学 (AMHERST COLLEGE) にて性理道德二科の博士より、従来シカゴ府の神学書院に転じ模範心理学の博士たりし人なり

一、書名は MENTAL PHILOSOPHY: INCLUDING THE INTELLECT, SENSIBILITIES, AND WILL. と題し、智情意三部を包括せる心理学と云う義なり、今約して心理学と名く

一、訳する所の本は一八六九年ボストン府ワシントン街、GOULD AND LINCOLN. の印刷に係はる

一、本邦従来欧州性理の書を訳する者甚だ稀なり、之を以て訳字にては固より適從する所を知らず、且漢土儒家の説く所に比するに心性の区分一層微細なるのみならず、其指名する所も自ら他義あるを以て別に字を並び語を造るは亦已むを得ざるに出ず故に、知覚、記性、意識、想像等の若きは従来有る所に従うと雖ども理性、感性、覚性、悟性等の若き又致知家の術語、觀念、實在、主觀、客觀、帰納、演繹、総合、分解等の若きに至りては大率新造に係はるを以て読者或は其意義を得るを難んずる者あらん、然るに凡そ此等眼目の字并に篇章の首項に係わる字目等の若きは通篇唯一定の字を用い、上下文義の為に已むを得ざる勢あるに非れば敢て漫りに他語に換え意を取りて翻せざるを以て読者其上下文義を推し通篇前後を照して之を熟考せば其旨趣に通ずる亦難きに非るべし、是訳者の庶幾する所なり

一、欧州性理の書、諸子百家の著す所殊に浩繁汗牛畜ならず、此書卷末に載する所の引書目を徴し以て其一斑を窺うべし、訳者の謙劣の如き固より其九牛一毛をも窺うこと能はず、況や見解の是非を論ずるに於てをや、固より後学の喙を容る所に非るを知る、然るに近歐洲の諸家一二の著述を閲するに親見創意亦鮮からず、而て此

書は大要其親見創意を取らざる者に似たり、唯此書は率ね立論旨趣正にして言辞を措くも亦詳明備悉かの哲家慣手の詰屈硬難深奥解し難きの処なし、且つ又此学に須用なる名目を提出するに至りては細大遺す無く、綱拳り目張り整然として条理あり、是を以て初めて此学に従事するの徒に在り其門を得、其梯を攀するの便に至りては此書特に其選に膺る者あらんと云爾。

明治十一年一月 訳者識

第五編教門中一定の真理と一連絡に於て観たる意の説の一派を論ず (CHAPTER V. THE DOCTRINE OF THE WILL VIEWED IN CONNECTION WITH CERTAIN TRUTHS OF RELIGION..... 560)

第一章 人の心意上に上帝の及ぼす所の力 (SECTION I. THE POWER WHICH GOD EXERTS OVER THE HUMAN MIND AND WILL..... 561)

第二章 人、己が身上に及ぼす力 (SECTION II. MAN'S POWER OVER HIMSELF..... 566)

○井上哲次郎『倍因氏 心理新説』四卷(一冊・二五丁、二冊・四六丁、三冊・五九丁、四冊・三五丁)(明治一五年)

緒言

一 泰西諸国、心理の書に乏しからずと雖も、其簡明にして周到なる者、倍因氏の著に若くはなし、然れども我邦に於いては、尚浩瀚に過ぐるを以て、今千八百七十五年の原書に就き、取捨折衷して此書を作る

一 此書は原書の要領を挙ぐる者なれば、編次の体、固より原書と同じからず、是皆我邦初学の便を図りて為す

者なり

一 心理と生理とは、其關係極めて密なるを以て、原書は生理上より心理を説き来たれり、是れペイン氏の頗る心理学に功ある所以なり、此書も僅に其一斑を存せり、亦ペイン氏の意に背かざるを欲する所なり

明治十五年三月

井上哲次郎識

心理学と哲学について

井上哲次郎講述『西洋哲学講義』 6卷（明治十六年〜一八年）

第4節 心理学（サイコロヂー）は哲学に最も親密なる關係を有し、全く相分つべからざるなり、實に心理学は哲学の根基なりと謂うべし、

ハミルトン氏曰く、哲学は心意を以て其論ずる所の第1の題目とせらざるべからずと、

デカルト、ロック、ベルクレー、ヒューム諸氏の哲学も主として心理学に本づくなり、故に心理学は哲学の本源なりと謂うも不可なること無かるべし、（五〜六丁）

○西村茂樹『心学講義』上下（上卷・五三二頁、下卷・四七四頁） 明治十八年五月—十九年七月六冊本（明治

二十五年九月合本）

心学講義序

此書余が日本弘道会に於て会員諸子の為めに講義せる稿本なり、心は人々自身の中に有りて、一身の主宰となる者なれば、心の学を為さんとするには、他に求むるを須いず、唯自を精察熟慮せば能く之を得べき理なり、然る

に古来より心の学を講ずる者多く其要領を得ず、或は空漠に驚せ、或は固滞に陥り、其正法眼を得る者甚寡し、独り西国のメンタルフィロソヒイは其心を論ずること確實にして虚無に流れず、精密にして粗漏の弊なし、余が心の学を講ずるに当り、法を西国に取る所以なり。

西国にて古来より心を論ずるの学士甚衆し、英米二国に於ても其大家と称せらるゝ者十餘人に下らず、其著書を熟読するときは、心の学に於て既に能く通曉する事を得べし、唯、諸学士各其教義を異にするを以て、其本末軽重分類解義等に付き多少の異同あることを免れず、余今学者の爲めに此学を講ぜんとするに、諸説を混合して之を説くこと能はず、必ず一の主義を定め、其主義に合う者は之を採り、合はざる者は之を省かざることを得ず、凡そ書を著はすに、人を教うるを主とする者あり、己の意見を述ぶるを主とする者あり、人を教うるを主とする者は専ら平易詳密を務め、寧ろ丁寧に過ぐるも、遺漏なからんことを欲す、己が意見を述ぶる者は、高妙正確なからんことを欲し、己が主義に緊要ならざることは措きて論ぜざること多し、今此書は人に心学と云う者を教うるの意を以て、務めて平易的実の説のみを録し、高妙奇異の説を採らず、其録する所は多く西国学士の言に拠る者にして、余が私見を以て論述せる者は至て少なし、西国の學術には皆一定の言語ありて、妄りに之を改むることなし、今其語を訳せんとするに、和漢共に之に適合するの言辞なし、已むことを得ず、姑く其義の較近き者を探りて訳語を作る、然れども極めて其妥当ならざることを知る、若し其語の適当ならんことを欲せば、原語を用うる如く者なし、因て訳語の下に一々原語を記し以て読む者をして之を記憶するの便を得しむ、心学の事に付ては此他猶所見の在るあり、將に他日を俟て之を世に問はんとす、

明治十八年三月

泊翁道人 西村茂樹識す

心理学と道徳学（倫理学）について

『殷斯婁（ウインスロー）氏道徳学』明治一二年四月

第一条は凡そ西国の学問の法則に依るときは、道徳学を学ぶ前に先ず人心学を学ぶを以て順序と為す。其故は道徳は行作に顕はるる者なれども、其本は皆心より出づることなれば、心の性能体用を知らざるときは、道徳の本義を了得すること能はざる者なればなり。

○有賀長雄『教育適用 心理学』七分冊 明治一九年・六月（九七四頁）

一、本書は主として教育家の実用に供せんが為に著すところなりと雖も説く所は素より心理学の原理なれば特に従事せざる人と雖も亦大に得る所あるべし

一、本書は著者の発明を述ぶる者に非ず、諸方の需に応じて講演せんが為に欧州大家の書に就て見る所を修述したる者なれば姑く之を講述と号して著述と称せずと雖も、敢て他人をして筆記せしめるの拙策を取らず、著者の公務勤学著作の余暇に自ら筆記する所なり

一、心理学中哲学に係る者と事実に基づく者との二科ありて、本書は其第二科を講明する者とす、事実に基づく者又三部あり、曰く心意生理学、曰く心意分解論、曰く心意発達論これなり、而して其最も重要な者を心意分解論とす、当今の説を以て世に知られたる倍因氏の心理学は即ち此の部に属す者たり、然るに氏の書発行以後既に三十年を経過し、其間此の学の進歩亦軽少ならず、幸いに昨年発行のサレイ氏「心理学撮要」なる書ありて、新旧の異説を羅網し、就中教育に関する論説を掲ぐる懇切餘蘊無し、現に我が大学に於て大に用ゆといふ、故に本書に於てもサレイ氏に依る所最も多きに居れり、氏は英国ケンブリッジ大学の哲学試験官たり、

又倫敦大学校の心理学試験官にして当今歐洲第一等の心理学者の一人なり、他に引用する所の諸書の如きは第一章に審なり。

明治十八年十一月一日

文学士 有賀長雄

右に掲ぐる学校情勢の模範はサレイ氏の工夫を直訳する者にして、其基本を欧米の民主政治即ち輿論政治に取る事明白なり、然れども我が日本は君主政治なり、而して学校の情勢は必ず其国の情勢に従はざる可らず、故にサレイ氏の論未だ我邦に適合せりとせず。

以上の四氏の翻訳・著書はすべてが大冊の大著であり、例えば高島が「今猶各地の師範学校にて参考書として必要の部類に算へらる」と云っている『教育適用 心理学』にしても九七四頁である。有賀自身もこの書は「主として教育家の実用に供せんが為に著すところなり」と述べているが、果たして十分に活用されたであろうか。有賀がこの著書の為に主に依拠したサリー『心理学撮要』(Sully, James: Outlines of Psychology with Special Reference to the Theory of Education 1885 692p.)は「現に我が大学に於て用ゆという」と言われているが、先に引用した「外山正一教授申報」にも東京大学「教科課程」にも、また円了の「稿録」にもサレーの著作は見られない。官僚の養成を主な目的としていた東京大学では哲学の一部としての心理学に関心はあったが、教育学の一部としての心理学は未だ関心が薄かったのではなからうか。サリーの新著(『Teacher's hand-book Psychology 1886 422p.』を翻訳)『左氏応用心理学』明治一九年一月・九七二頁)した和久正辰は訳書の「例言」に「有賀氏の講述せられたる「教育適用 心理学」は左氏の撰述に係る夫の心理学提綱に基き傍ら諸家の所説を参酌せられたるものなれば」と軽く言及しているが、この翻訳書も膨大なものである。ちなみに、井上哲次郎が抄訳し

たペインの Mental and Moral Psychology の翻訳書（矢島錦蔵『心理学』明治一九年・六三四頁）も大冊の書である。この様な詳細・膨大な書籍は参考書ならばともかく、教科書としては不適當であろう。

二一三 初期翻訳編著に対する批判

『教育応用 根氏心理学』（明治二六年）の著者能勢栄は明治一五年九月～明治一八年八月、長野師範学校校長を勤めた。彼は自著の序文に、前述の諸書を教科書として使用することの弊害を烈しく指摘している。

予が曾て目撃する所に由れば尋常師範学校を卒業したる正教員にして、概念と觀念と、感覺と感応との區別を知らず、意志と意識と抽象と概括との説明を為すこと能わざるものあり、而して其の学習したる心理学の書を問へば、倍因氏及び左礼氏の書を学べりと答ふ。此の事は格段の例なれば之を以て一概に推理することを得ずと雖、方今、我国尋常師範学校に於て、教育学に倍因氏、魯氏（ローゼンクランツ―引用者）の書を用い、心理学に倍因氏、左礼氏の書を用いる如きは、徒に高尚と浩瀚とを貪る好奇心に外ならずして、卒業後の実用如何を顧ざるものと謂はざるを得ず（四～五頁）。

心理学は、諸学の王とも称する深遠広大なる学科にして、独教育のみならず、苟も人類の行為に関する事項は、必之を此に糺すに、即ち此の学之が結局の基本と為らざることなきなり。故に心理学は、之を哲学として学ぶも之を科学として学ぶも、決して簡易なる学科にあらざるなり。ペイン氏の曰へる如く、其の結局は曖昧模糊の中に隠没するものと雖も、又氏の曰へるが如く、幸に吾人を教導する為に實際の価値を有する部分は、全く普通理会力の範囲内に來たれるなり。（中略）世間心理学の著述尠からずと雖、多くは単に心理学を学ぶの用に供したるものにして、児童を教育する教師の実用に適應するもの極めて尠し、元來小学校教師の実用に供すべき心理学は倍因氏、左礼氏の如き浩瀚空漠なるものにあらずして、其の最要点を撮取して、直ちに教育に應用する

ことを得るものならざるべからず。通常の知識を以て容易に会得せらるゝ如く書きたるものならざるべからず。非常に高尚なる学説又は独断の教理を載せて徒らに読者を昏迷せしむることなく、普通心を基本として立論し、公平に判断し、明瞭に解釈したるものならざるべからず（九〇―一〇頁）。

二―四 師範学校と心理学教科書・参考書

先に紹介した高島平三郎の「心理学説の変化」に列挙されている心理学書の翻訳者あるいは著者は教育界、特に師範学校関係者が多くみられる。これを裏付けるように、西村正三郎は明治二〇年代の状況について次のように述べている。

教育の原理を心理学に求めんとする気運一たび起りてより英傑の士の思想を此学に注ぐ者各国に輩出し或は実験に基き或は思弁に訴え研究論難の盛なること実に前古に其比を見ず、故に世人往々今日の時代を称して心理学の時代なりと曰へり。此の時に当り、任を教育の事に受くる者は必らず心理学説の概略に通じて之が運用の務に堪ゆることを要す。師範学校に於て生徒に心理学を授くるは畢竟、此我国に於ても近時、学者の此学の研究に従事する者漸く多きを加え、従て著訳書の世に出ずる者亦少なからず。殊に師範学校用の教科書として出版したる書に至りては其多きこと、十指を屈するも尚之を悉するを能はず。（西村正三郎校閲・高島平三郎著述『師範学校教科用書 心理綱要』普及会 明治二十六年十二月「序」）

西村が述べているように、師範学校における心理学研究が、教科書あるいは参考書としての心理学書の改良、ひいては其充実を促進したといえよう。それには我国未曾有の大教育改革があったからである。

三 教育の近代化

三―一 近代化の課題

我国教育の近代化は明治四年七月の文部省の設置、其れ以後の官制、また翌五年の学制発布、其の後の教育令、学校令などの法制によつて紆余曲折しながらも、発展した。筆者はこの過程を論述する十分な準備も能力もないが、哲学専修として明治二〇年に出発した哲学館が、教育行政の制約と教育に対する国民の期待を受容し、発展し、かつ変容する、その源泉とも云うべきものを、明治初期の我国教育の近代化の流れの中に探つてみたい。

文部省『日本教育史略』（明治一〇年）は別として、明治二〇年代になると、我国や諸外国の教育通史の紹介が盛んになる。その取り扱う年代の範囲はすべて古代から現代であり、我国の教育通史は章を改めて学制時代、教育令時代、学校令時代の三区分を設けて、教育勅語に基づく教育によつて終わっている例が多い。明治時代単独の教育史は、野田義夫『明治教育史』（明治四〇年）まで待たなければならなかつた。この第一章概観「序説」では明治の教育を六時代に区分している。

- 一、藩学時代（明治維新〜学制発布・明治五年八月）
- 二、学制時代（明治五年〜明治一二年九月）
- 三、教育令時代（明治一二年〜明治一九二月）
- 四、学校令時代（国家主義奨励時代・明治一九年〜日清戦役前まで）
- 五、国民自覚時代（日清戦役・明治二七・八年〜日露戦争・明治三七・八年）

六、内容完成時代（日露戦争以後）

一、藩学時代は教育の近代化への準備期であつて、明治四（一八七一）年、文部省の設置に伴つて文部卿となつた大木喬任（天保三年・一八三二）明治三二年・一八九九）の下で学制調掛に任命された辻新次（天保一三年・一八四二）大正四年・一九一五）がフランスの知識を駆使して学制起草に参画し、後年の教育令の制定・改正にも参画している。高橋俊乗『日本教育文化史』（三）（講談社 昭和五三年）によると、「学制の草案」が出来上がったのは明治五年六月で、文部省から太政官に何書を出し、同月二四日に太政官が学制制定の指令を下した、と言う（一〇六―一〇七頁）。この何書の「後来を期し当今着手の順序を立つる左の如し」の各箇条（九箇条）を高橋は挙げている（一〇七頁）が、本論主題に関しては、「一、厚く力を小学校に用いる可き事。一、速に師表学校（師範学校）を興す可き事。一、生徒階級を踏む極めて嚴ならしむべき事。一、反訳の事業を急にする事」の四箇条が注目される。高橋の解説は「小学校を主とし、中学校は漸進主義をとり、（中略）。師範学校は小学校の発展を図る為に必ずますます盛んにしなければならぬ。反訳を盛んにせんとしたのは、外国文化を大いに吸収する為であるが、特に「学制」にとつては教科書の欠を補おうとしたのである。（後略）」とある。ここに我国の近代教育の基本は決定したといつてよい。第二期以後の教育令・学校令など教育法制は第一期に山積みされた課題、つまり国民皆教育の方針に基づく小学校の全国設置、大量の教員の必要性に伴う師範学校の増設、教員養成の充実、師範学校教育内容の整備に対する施策であり、これらの施策は、一面、当時の政治・社会思想、例えば、明治一四年の政変、自由民権・保守国粹の思想的対立の産物と看做すこともできる。

本節の終りに各時代の教育思想について、簡単に触れておきたい。

一、藩学時代は幕末の教育思想・形式の踏襲。

二、学制時代は米国一辺倒と言つてよく、文部省はモルレー (David Murray 1830 ~ 1905) を学監 (顧問) として招聘して諸学校教則を定め、また、新たに創設された東京師範学校の教師スコット (Marion MacCarell, Scott 1843 ~ 1922) は米国式の教授法を伝え、理論より實際を重視した、米国一般の実利主義的教育を行った。

三、教育令時代は、米国の師範学校に留学していた、井沢修二と高峰秀夫が帰国。知識偏重の「注入主義」を排し、「開発主義」の教授法を主張した結果、ペスタロッチの教育思想が流行した。一方、英国からの書籍輸入が多くなり、ベンサム、ミルの功利主義、スペンサー、ペインの教育学が愛読された。その結果、米国風の実利主義を圧倒して、概して主知主義的教育が尊重された。

四、学校令時代は森文部大臣の教育改革が行われた。また欧化的風潮の反動として国粹保守主義が強力となり、国語漢文の復興を見る。更に帝国大学文科大学の雇教師ハウスクネヒトが「ヘルバルト」派の学説を講じた。文科大学には「特約生教育学科」が明治二二年四月 ~ 二三年七月の間、暫定的に設置された。卒業生は谷本富を初め一二人で、沢柳政太郎、湯原元一、大瀬甚一郎、尾原亮太郎の四人が聴講した。ヘルバルトの教育学は「教育の目的の部分は倫理学に拠り、其の方法は心理学に拠り」構成され、倫理学と心理学とが重要な補助科学をなしている。「教育の目的は人を徳化するにあり、其手段としては管理、教授、訓練がある」といわれる (下田次郎『教育思想の変遷』育成社 明治三九年 四二頁)。従つて徳育を教育の理想とする思想は国粹保守主義と国家主義との一致をみた。この時代の究極は教育勅語による儒教的徳育の確立である。

五、国民自覚時代は、我国の学者の独自の研究が進み、文部省も海外留学生派遣に力を入れるようになった。

「元文部省海外留学生一覽」(文部省専門学務局 明治四二年一月)によると、明治八年〜四一年の教育学の文部省海外留学生は二七人であるが、明治二五年以降に集中している。特徴のあるのは、明治三六〜三八年の三カ年の間に四人の留学生がいるが、明治三六年・*吉田熊次(三年・仏独・倫理学)の他、同年・田所美治(二年半・独仏英米・教育行政法・文部省参事官)、同三七年・服部教一(三年・独米・教育行政法・文部省視学官)、同三八年・植山栄次(二年・独米・教育学・文部省視学官)、松浦鉄次郎(一年半・独米・教育行政法・文部省書記官)というように、文部官僚で占められている点である。これ以前では、明治二五年・*波多野貞之助(三年・独・師範学科及び実業補習学校に関する事項)、同二六年・大瀬甚太郎(三年・独仏・教育学)、同三一年・松本亦太郎(二年・独・心理学)、同三二年・井口あくり(三年・米・教育学)、谷本富(三年・英独仏・教育学)、*溝淵進馬(三年・独仏・教育学)、下田次郎(三年・独英米・教育学、女子教育法)、樋口勘治郎(三年・英仏・教育学、教授法)、森岡常蔵(三年・独・小学校教授法)、同三三年・*小泉又一(二年・米独・教育学、学校管理法)、同三四年・*塚原政次(三年・独米・心理学)、*熊谷五郎(三年・独・教育学)、小西重直(三年・独米・教育学)、以上である。(*印は哲学館の教員経歴者)

これらの学者達が留学を終り、帰国するのがこの時代である。彼らは直接ヘルバルト派の学説を学び、併せてその短所をも学び取ってきた。日清戦役後に、大瀬甚太郎、黒田定治、波多野貞之助が帰国。明治三五年に、谷本富、溝淵進馬、下田次郎、同三六年に、小泉又一、樋口勘次郎、小西重直、森岡常蔵、乙竹岩造等が、ヴェルマン、ナトルプ、ベルゲマン等の新しい社会的教育学を習得して帰国するに至り、ヘルバルト派の学説は衰退した。この時代の特徴は学者達が各国の学説に左右されること無く、独自に我国の教育の創造に意欲を示したことであった。

六、この時代に関しては時間的に短期間である故、特記なし。

三十二 師範学校の授業科目

いま、師範学校教科書と参考書に話題を戻せば、師範学校は明治一四年「改正教育令」により、初等、中等、高等の三科とされ、その学科目は師範学校教則大綱（明治十四年八月十九日達第二十九号）に次の通り規定されている。

第三条 初等師範学科ハ修身、読書、習字、算術、地理、物理、教育学、学校管理法、実地授業及唱歌、体操トス

但唱歌ハ教授法等ノ整フヲ待テ之ヲ設クヘシ以下之ニ倣フ

第四条 中等師範学科ハ修身、読書、習字、算術、地理、歴史、図画、生理、博物、物理、化学、幾何、記簿、教育学、学校管理法、実地授業及唱歌、体操トス

第五条 高等師範学科ハ修身、読書、習字、算術、地理、歴史、図画、生理、博物、物理、化学、幾可、代数、経済、記簿、本邦法令、心理、教育学、学校管理法、実地授業及唱歌、体操トス

更に明治一九年、教育令は廃止され、師範学校令に伴う、尋常師範学校ノ学科及其程度（明治十九年五月二十六日文部省令第九号）により、「勅令第十三号師範学校令第十二条ニ基キ尋常師範学校ノ学科及其程度ヲ定ムルコト左ノ如シ」と学科目の教育内容が規定された（省略）。

この師範学校令は、周知の通り、高等師範学校は国立とし、尋常師範は公立とされた。

高等師範学校の「学科と其程度」は「高等師範学校規則」（東京高等師範学校一覧 明治三〇年～三二年）第十條に文科と理科について規定している。文科のみを挙げる。

○倫理・*人倫道德の要旨、帝国憲法の大意、*修身教授法。○教育学・*普通教育学、*特殊教育学、*教授法、*教育史、*応用心理学、*教育法令、*実地練習。○国語・*講読、*文法、文学史、*作文、教授法。○漢文・*講読。○英語・*講読。○歴史・本邦及び外国の政治地理、地学概略、教授法。○哲学・心理学、論理学、哲学史。○体操・*普通体操、*兵式体操、*教授法、○独語・*講読。○習字・書法、練習、教授法。

【*印のものは理科と共通】

右の教科のうち、心理学関係のみをみると、尋常師範学校の高等師範科に「心理」があり、高等師範学校では、教育学の中に、「応用心理学」、哲学の中に、「心理学」が見られる。「応用心理学」は文字通り教育学の一環としての心理学であつて、例えばサリーの心理学であり、哲学の中の「心理学」はヘヴンやベインの心理学を指していたのであろう。尋常師範学校高等科の「心理」は、これだけでは具体的なことは分からないが、各県師範学校の報告書に記載されている教科書・参考書によつて具体的に知ることが出来るであらう。しかし僅か三校の例しか知り得なかつた。つまり、三校共に、「心理」は「心理の大意を授く」科目とする。教科書は、山口師範では湯本武比古『新編応用心理学』（明治二七年）、長野師範では元良勇次郎『心理学十回講義』（明治三〇年）、島根師範では大瀬甚太郎・立柄教俊『心理学教科書』（明治三五年）であつた。従つて「心理」は通常の形式と内容の講義であつたと思われる。この様に高等師範学校を頂点し、全国に存在する尋常師範学校において、心理学は教育学では、「応用心理学」として、哲学では「心理学」として、講義されたのであるから、その教科書と参考書の需用は莫大なものであり、それに応じて充実したのも当然のことであつた。

三 哲学館（東洋大学）と心理学・教育学

三一 円了の教育説

円了は明治二〇年七月二二日、私立哲学館設置願を高崎 東京府知事宛に提出した（『百年史 資料編1・上』八四〜八六頁）。前掲野田義夫説の時代区分でいえば、帝国大学令が発布された第四期「国家主義奨励時代」であった。前述の繰り返しになるが、この時代は円了が直接間接に学んできた英米風の学問は凋落し、独逸風の学問に取って代られつつあり、学界の風潮は完全に独逸に向いていた。哲学館はこの風潮に左右されることなく、普遍的真理の発見を目的とし、思想練磨の術である哲学を専修する、高等教育の場として出発した。「術」とは「学理を事実に応用して効果を生ぜしむべき手段方法なり。しからば教育はなになるかというに、術なりと答へざるをえず」と、円了はいう（『教育総論』第一段 学科・『選集』一一卷・三七八頁）。円了が「思想練磨の術」を身に着けてほしいと念頭に描いたのは、巷間の指導者である若き宗教者（僧侶）であったであろう。しかし開館当初、彼は独自の教育については述べず、専ら哲学の必要性を世間に訴えている（哲学館開館旨趣 明治二〇年九月一六日『百年史 資料編1・上』・八九〜九三頁）。円了はこの点を意識していたようで、後年「従来哲学館は一般の哲学を教ふる目的なりしを以て未だ別に主義等を明言せざりしが」と述べている（『哲学館改良目的について』・明治二二年一〇月・『同前』一〇三頁）。教育を主題とする円了の著書は講義録の『教育総論』（明治二五年）がその代表的なものであるが、論説、講演、学生への訓示等から彼の教育思想は知ることができよう。結論的に言えることは、例えば「教育はその固有する性能を開発するに過ぎざれば、たとえ同一様の方法を施すも、決して同一様の人となすあたわざるは理の当然なり」（『教育総論』緒論・『同前』・三七六頁）とか、「そもそも教育の目的は一個人の心意を開発して完全なる人物を作るにあり」（『教育宗教関係論』明治二六年

『選集』一一巻・四四七頁）と言っている通り、彼の教育は「開発主義」に立っていたということである。また、知育、徳育、体育の三育とする一般説とは違い、彼は以下の四育説を主張し、教育を「心育と身育の二種」とし、更に心育を「知育∥理育∥真を得せしむ、情育∥美育∥美を得せしむ、意育∥徳育∥善を得せしむ」の三種とし、身育は「体育∥健を得せしむ」としている（『同前』三八五頁）。円了のいう「心育」は『奚般心理学』において心理学の範囲を智情意とした西周を想起させる。

三二二 教育体制の確立

哲学館を開設して間もなく、円了は「政教問題」を課題とする欧米視察（明治二年六月九日～二年六月二八日）に出かけ、帰国早々その成果に基づき哲学館を「日本主義による日本大学の階梯」と性格付けた。次いで「日本固有の学即ち国学漢学仏学」を教授する専門科の開設趣意（明治三年九月・『百年史 資料編1・上』一一二頁）を発表し、『教育宗教関係論』の中で、珍しく円了は哲学館開設以来の心情を語り、「哲学館の目的とするところは文科大学の速成を期し、広く文学、史学、哲学を教授するにあるも、なかならず教育家、宗教家の二者を養成するにありて、…」と、教員と宗教家（僧侶）の養成が哲学館の目的であることを明らかにした（『同前書』四四九頁）。このことは既に明治二年一〇月の「哲学館改良目的について」という講演の中で述べていることであるが、その時は「教育家、宗教家、哲學家」としていた（『前掲書』一〇七頁）。しかし、今は具体的に職業との関係が意図されている。これを実行に移したのが、入学試験を伴い、教育学部と宗教学部の二学部制とする明治二八年の学科改正（『百年史 通史編1』一六〇～一六三頁・改正学科表・担当講師は『百年史 資料編1・下』七～九頁）であった。その編成の意図と目的は、左の引用通り、我国の最高レベルのものであった。これは「私立哲学館入学案内」（明治三二年一月）として公表され（『百年史 資料編1・上』一六九～

一七〇頁)、また一般市販の『官公私立学校要覧』(明治三十一年 四四〇四六頁)に殆ど同文が掲載されている。

教育学部は「高等師範学校文科に模範し帝國大学文科を参酌し専ら教育家必須の科目を撰見て学科を組織す、故にその学科は文部省教員検定試験準備及公私小学中学教員の講習其他史学文学哲学の専修に適す」、宗教学部は「帝國大学文科に模範し泰西大学宗教部を参酌して学科を組織す、故に宗教家にして高等の學術を研究せんと欲するものの実修に適す」(『東洋哲学』第二編第六号 明治二十八年八月二日)

三十三 心理学・教育学関係科目担当者

以下の担当者は『東洋大学百年史』「通史編 1」、「資料編1・上」、「同・下」を主とし、『東洋大学人名録 役員・教職員 戦前編』を参考として摘出し、()内に担当した年度を示し、判明した範囲で生没年を付記した。心理学と教育学等の担当は年度によっては明確にする事は出来なかつた。担当者の著書等は心理学、教育学、倫理学、翻訳編述など広範囲にわたっているため、担当者を心理学者、教育学者のいずれとも断定することは出来ないが、広義には、教育学者としてよいと思う。

哲学館は明治二八年の学科改正によって、設立以来熟考を重ねてきた教育機関としての自己表明を社会一般、特に教育界に向かつて行つた。円了が哲学館の性格について熟慮していた時期は、「第四期国家主義奨励時代」に当たる。以後、日本の教育思想は「第五期国民自覚時代」に入る。この意味から云つても明治二八年の学科改正は画期的な出来事であつた。

担当者各個人の学説・業績を分析した結果から総合的に学的特色を明らかにするべきであるが、この作業は後日に譲りたい。ここでは哲学館に集まつた人々のうち、ヘルバルト学派に関する翻訳・著書のある教育学者を紹介

介するに止めたい。先に述べた様に明治二一年にエミール・ハウスクネヒトが帝国大学教師として招聘され、ヘルバルト学派の教育学を我国に紹介した時、その特約生教育学科に、山口小太郎と稲垣末松が在籍し、沢柳政太郎はこれを聴講していた。担当者のうち帝国大学卒業者では、井上哲次郎と同年の国府寺新作が明治一三年卒業で最も先輩である。

哲学館・東洋大学の心理学・教育学担当者は、第二次世界大戦の敗戦までを区切りとすると、昭和二一年度の飯島宗享、中 新、で三七人となっている。管見に触れた範囲では、国府寺新作を初め担当者の業績は以下の通りである。

○国府寺新作（M二一、二二、二八）

『ケルン教育学』・明治二六年。『実用心理学』・明治二五年。磯江潤との共訳『応用教育学』明治二五年・J・スエットの原著の意訳。英米独仏の教育学者の思想を抜粋したもの。『教育学』（講義録）・ジヨホノット著「訓練の主義及び実行」に基づいて立論したもの。『魯氏教育論』一部（明治二〇年）・二部（明治二一年）・ローゼンクラント著、米国ブラッケット英訳、ハリス補注の英訳本の翻訳書。『独逸・普魯西 教育新史』明治一九年・ドナルドソンの講義録に基づくもの。相沢英二郎との共著『新式教授学』明治二五年・修身科から商業科に至る各教科の教授法。

○沢柳政太郎（M二二、二五、二八）慶応元年～昭和二年

ケルン著・立花鉄三郎との共訳『普通教育学』・明治二五年。本田信教との共著『心理学』明治二三年・「学芸シリウス」新書の一冊。『心理学 ヒューム悟性論』一六七頁。『心理学 情感編』三石賤夫との共著『普通心理学』明治二七年・心理学の一般的入門書。『心理学』東京専門学校 一四八頁。広沢定中との共編『ペス

タロッチ』明治三〇年・ド・ガン著『ペスタロッチ伝』（一八七四）のラッセル英訳本（一八九〇）の翻訳。

○山口小太郎（M二五、二八）慶応三年〜大正六年

ケルン著・山口訳『教育精義』明治二五年

○能勢 栄（M二八）嘉永五年〜明治二八年

『ヘルバルト主義教育説』（福島県進達両部連合教育会）明治二六年。『新教育学』明治二七年。『ヘルバルト派教育学講演』（麹町区）明治二八年。『通信教授 心理学』明治一九年（『教育学』第二卷 明治二一年は改定版）。コンペーレ著『教育応用 根氏心理学』明治二六年。ライン著・『莱因氏教育学』明治二八年。

○湯本武比古（M二八、三四、三六）安政二年〜大正一四年

『新編教育学』明治二七年・ヘルバルト及びヘルバルト学派の学説を紹介しながら論述している。『ラインの教育学原理』明治二九年・ヘルバルト教育学入門としてケルン等弟子の学説を読む必要に応じたもの。『新編応用心理学』明治二七年・独逸留学中に書き溜めたもの。独逸諸学者の説によるが、主としてマースの説による。竹内楠三との共著『心理学新論』明治三二年。『新編教授学』明治二八年・ライン及びリンドネルの説に拠り立論したもの。『孔子の五段教育法』明治二八年。

○松本孝太郎（M三〇、三二、三三、三四、三六）明治三年〜昭和七年

小西重直との共著『教育学新教科書』明治三五年・第一編 教育理想の変遷、第二篇 教育の目的、教育方法。『ティチエナー心理学綱要』明治三三年・米国コーネル大学教授ティチエナーの講義の解説。英国の心理学説に立脚しているが、独逸の実験心理学を参考にしていう。福来友吉との共著『心理学新教科書』明治三五年・心理学の概説書。『普通心理学講義』明治三一年・ヴント等の学説を参考として新心理学を説明し

たもの。『教育学要義』明治三九年・ヨーロッパ教育学の新学説の紹介。

○熊谷五郎（M三二、三三、三四、三六）明治二年、

『ヴィルマン氏化学』明治三三年・第二巻一〜四編の解説。『社会的教育学』ベルグマン『社会的教育学綱要』の翻訳（附論二〇篇）明治三五年。『教育学』明治三四年。ツッテス『教授法』明治三五年・著者ツッテスはオーストリア高等師範学校校長。第二巻で、各教科教授法を歴史的に検討し、その利害得失を述べている点に本書の特色がある。

○稲垣末松（T二、一〇）

ベルグマン『社会的教育学綱要』明治三八年・「教育学改造の必要性」を内容とし、既に二〇年を経たヘルバルト教育学に対する反省を促している。リンドネル『麟氏教育学』（フロエーリヒ補説 七版）明治二六年。『近世教育学』明治四〇年・バルトの教育学説を骨子とし、ヴィルマン、ナトルプ、ベルグマンの社会的教育説を加え、ライの実験教育学の観察結果を採用している。

○田中治六（M三六、T二、一〇、S一〇）明治二年、

リボー『心理学史』（講義録）・「独逸国最近心理学説史」という副題がある。しかし通論ではなく、一章ヘルバルト、二章ヘルバルト派及び人種心理学、三章ロッチェの局部微号説を説く。『心理学史』（講義録）・ジョン・ロックからリウヴィスの心理学説を紹介。樋口長市、佐々木吉三郎、斉藤斐章と共著『師範教科心理学』明治三四年・四人が個人説の偏向を避けるため、協議の上、大綱を決めて斉藤が編纂したもの。三石賤夫と共訳『麟氏実験心理学』明治二七〜二八年・上下二巻、上巻は総論、第一編心象第一・二章、下巻は第一編第三・第四章、第二篇感情、第三編意力（努力）、附録に精神病等載せる。

このように各担当者のヘルバルト・ヘルバルト派教育学に関する業績を摘出してみると、哲学館はまるでヘルバルト教育学の牙城のように思われるが、必ずしもそうではない。確かに明治二八年度は国府寺、沢柳、山口、能勢、湯本たち、ヘルバルト教育学を研究した学者が科目を担当していて、哲学館教育学の陣容は壯観である。しかし、彼らの業績は広範多様であり、決して一様ではない。例えば沢柳は、既に凋落しつつあったペスタロッチの伝記をケルン翻訳の後に著している。沢柳は教育者としてペスタロッチに心酔し、その理論を実践したのである。つまり彼は研究成果を超えた所に教育の理想を求めていた。従って、僅かヘルバルト・ヘルバルト派の業績のみから哲学館教育学の特徴を判断することはできない。本稿では論及することが出来なかつたが、昭和一九年、つまり敗戦直前まで東洋大学の心理学と教育学を守り抜いた高島平三郎と吉田熊次の教育思想も決して看過することは出来ない。これらの残された課題は別の機会に譲りたい。